

VI む す び

3期にわたっておこなった平城京羅城門の調査は、門基壇、朱雀大路西側築地及び側溝、九条大路北側築地及び側溝などを明らかにするとともに、旧来から論ぜられてきた平城京条坊の研究に新たな知見をもたらしたものであった。現在、羅城門の調査は、発掘を実施した範囲も818m²と京の規模に比して極めて僅かであり、研究も緒についた所であり、多くの課題が残されている。

羅城門付近の地形は、平城京内でもっとも低い所に位置しており、門より東及び西側の山麓にかけ徐々に比高が増している。京廃絶後、次第に宮及び京内が水田化される道程で、京内の用排水とからみ、大路などの溝がかなり整備されたものと思われる。江戸時代、主要な用排水路の一つであった佐保川を京内の南半部で朱雀大路路面上に位置させたのも、主要な用排水路が地形的な制約を受けた結果によるものであろう。

佐保川が朱雀大路面上に位置した結果は、先の門周辺の発掘調査をみても明らかのように、門及び周辺の大路の解明に大きな支障をきたしてきている。

今回での調査でもっとも大きな成果は、羅城門基壇、朱雀大路西築地・側溝、九条大路北側築地・側溝の発見である。しかし、門東側地域は、かつての河川の流路下であり、大路の諸遺構の遺存状態は充分でなかったこともあり、朱雀大路の幅員、大路中軸線の位置、門の規模など、門を中心とした京の復原に大きな課題を残している。

羅城門・朱雀大路と朱雀門及び宮内の諸殿舎との方位についてみると、大路に対し宮内の造宮が南で東に約4'の振れがみられる。この造宮方位の振れは、京内にある薬師寺、大安寺、唐招提寺などの地割にもほぼ近い数で認められている。この方位の振れは、宮の造営時期についての研究に大きな課題を提するものである。

宮城の造営は盆地の最北の丘陵をなかば利用しておこなわれている。今までに検出した羅城門の基壇上面と朱雀門及び大極殿基壇上面との比高をみると、朱雀門が13.6m、大極殿が21mの高さとなっている。羅城門をぬけた朱雀大路面上からみた宮の偉容は他を圧したものであろう。

出土遺物で注目されるのは、人面を墨書した土器群・土馬などである。続紀に散見する羅城門前の雨乞いや、種々の祭祀とも関係するものであろうか。また、瓦類では、用いられた軒丸瓦、軒平瓦の組合せが宮内の組合せと若干異なっている点に注意されるが、大半が大路側溝からの出土であり、さらに検討を要しよう。すでに述べたように、羅城門の調査は広く京内の調査研究の第1歩であり、今回の調査で残された課題は多々ある。最近の京内の開発はめざましいもので、今後数年で京内の諸遺構は全く壊滅の状態になる。早急に京の遺跡について、その保護と調査の方策をたてるべきであろう。